

東北限 本作土居

四至 西南限 南里江底

右志者、奉為、(北条時宗)法光寺殿御菩提、限永代、所寄進也、然者庄家亘承知、勿令違失、仍寄進之状如件
(二二八)弘安十一年正月十八日

沙弥(花押)

とあり、川副莊のうち東・西故衙こがの荒野を沙弥某が高城寺に寄進している。さらに同文書の「肥前国守護北条為時寺領寄進状案」には、

寄附、春日山高城禪寺

肥前国河副庄三分一方、米津土居外旱瀉荒野老所事

限東 米津并東故衙土居

限南 米津土居

四至 限西 南里前通旱瀉

限北 南里土居

(中略)

(二二八)正応元年十一月七日

(北条為時)前遠江守平朝臣 在判

とある。前遠江守肥前守護北条為時は、当時勢力の強かった鎌倉幕府の祈禱所高城寺に川副莊内の「旱瀉荒野」

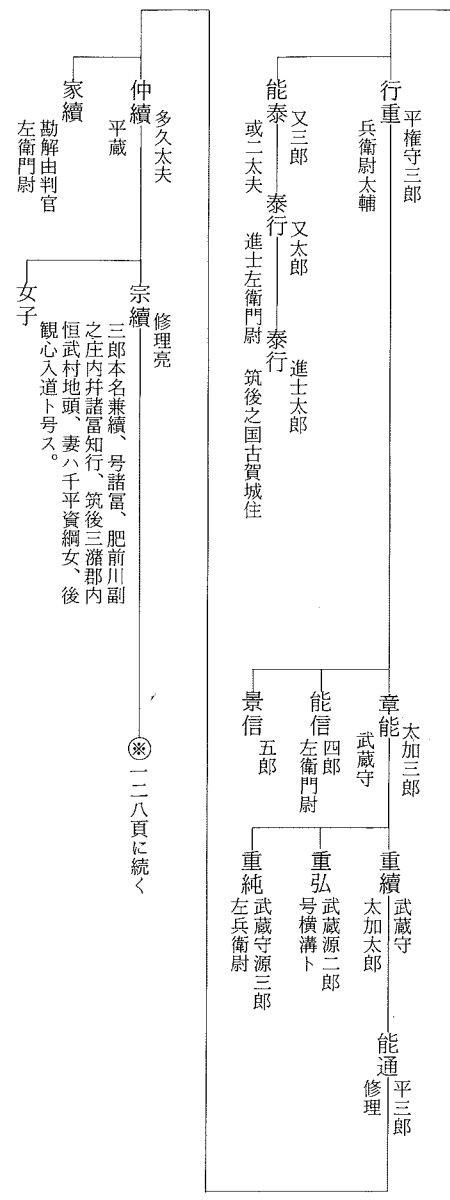
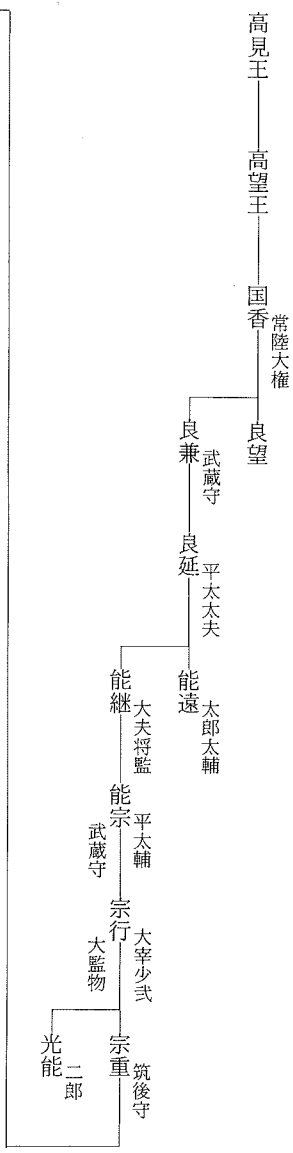
を寄進した。その地域は、東に米津(米納津)から東故衙(東古賀)にいたる土居(堤防)があり、南に米津のところ土居があり、北は南里のところに土居があつて、西の方に干瀉が広がるがっていたと考えられ、コの字形の土居に囲まれた地域であつた。北条為時はこの土地を新しく田地として開き、僧侶の食料にあて、その功德で亡き執権北条時宗の菩提供養とすることを願っている。これらの史料よりみれば鎌倉中期の現川副町地域は、干瀉・荒野または芦野のような状態を含む陸地化寸前の、しかも農業生産の可能な土地になりつつあつたこと、また土居をつくり海水を防ぎ、人工的に干拓をはじめたことが推測される。諸富町一帯は一部干拓があつたかわからないが、その大半は筑後川の堆積作用によって形成されたもので、自然的な陸地化現象によるものだったであろう。また、その陸地化も川副町一帯よりも相当古いと考えられる。

二 諸富氏の入封

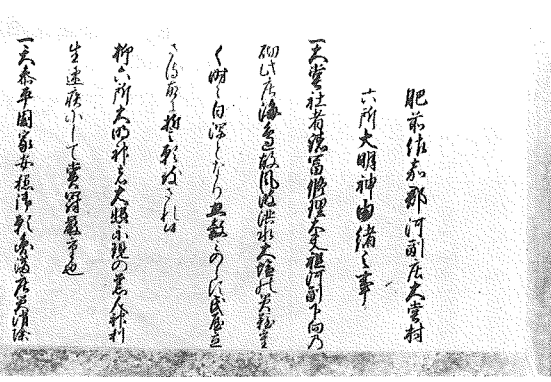
諸富氏の入封

大堂神社所蔵の『六所大明神由緒書』によると、弘安二年(一二七九)に同社の神殿・楼門を諸富氏が創建したとある。この由緒書の詳細の真偽については検討の余地があるが、六所大明神(大堂神社)と諸富氏との密接な因縁が理解できる。元来大堂神社は筑後川沿いにあつたものを、江戸時代になって鍋島氏によって現在地に遷座したとの説もある。現在の町名も諸富氏に由来するのである。諸富氏は筑後国三潯郡諸富村(現福岡県大川市大字酒見)に本拠をおく武士である。『肥陽諸系図』の「諸富之系」によると、筑後国在住の諸富氏の一族が鎌倉期に

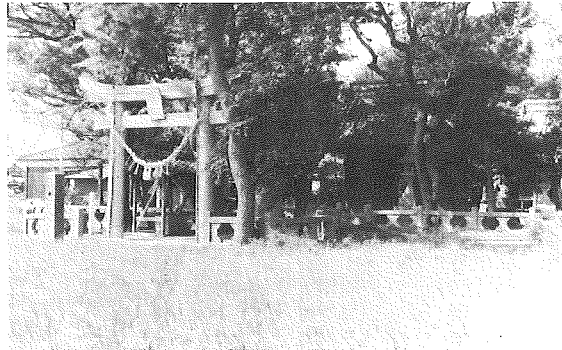
当町大堂に進出してきた。その系図によると、



諸富氏の入封



「六所大明神由緒書」(大堂神社所蔵)



諸富氏の本拠地 (現大川市大字酒見) の日吉神社

賞として所領がこまかく分割されていたが、諸富宗續の進出もこの時期とみるのが妥当であろう。であれば一三世紀末の頃と推定される。諸富氏は有力名主層であり、家子とよばれる同族や、郎党などよばれる従者や、下人・所従の下層従者を率いた小武士団をなしていたものである。そして、平時には農業に従事し、非常時には一族団結して戦ったであろう。この諸富氏一族の館跡が、今度新しく発見された徳富権現堂遺跡の環濠集落に
関係するものではなからうか。

とあり、諸富宗續が川副荘内の諸富を知行したという。この宗續は三瀨郡内の恒武村の地頭である。つまり、筑後三瀨郡の地頭が筑後川を渡り、川副荘の現在の諸富の地へ進出してきたのである。川副荘が武士に侵蝕されている具体的実例である。ともかく、筑後三瀨郡諸富を親郷とし、川副荘内諸富を分郷としたのである。院の重要な収入源であった神埼荘も元寇以後、恩

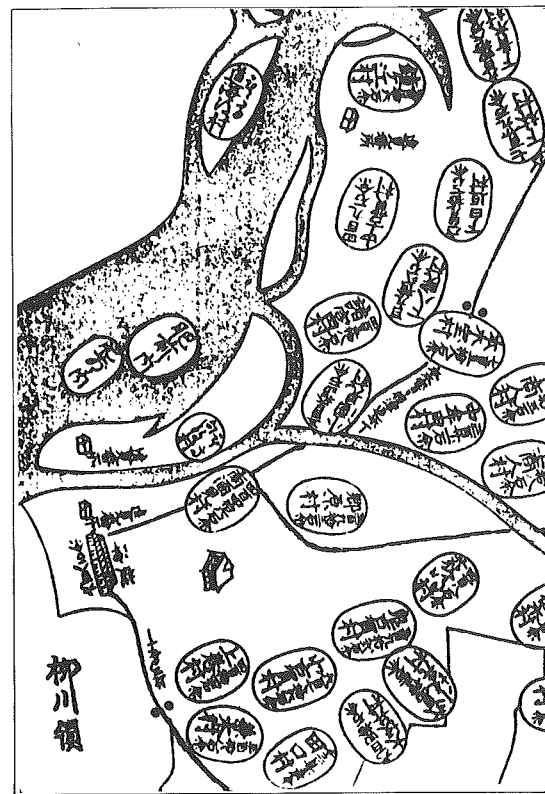
『龍造寺文書』の正平七年(一三五二・文和改元)の「平某・沙弥某書状」によれば、「安藤次郎兵衛尉右有申肥前国河副庄小具井とある。「小具井」は明らかに小杭と考えられるから、小具井小次郎とは鎌倉初期にその存在が「極楽寺免田文書案」で確認された小杭五郎則方の子孫ではないだろうか。「小具井小次郎跡」の地が川副庄内とあるから、今の小杭部落付近と判断される。また、この書状の宛名が龍造寺又七になっている。つまり一四世紀半ばより諸富地方と龍造寺氏との結びつきが見られる。

『筑後国諸氏系図』の「諸富系図」によれば、

譲与、嫡子源三郎照所在(中略)肥前国河副庄角町、名等田地屋敷事、(後略)とあり、山領の西隣の角町(現佐賀市北川副町大字光法)一帯の名田化が進んでいることを示している。川副庄が徐々に解体しはじめ、有力農民が耕作地に對し私有性を強め、その標示として土地に自己の名を冠する傾向が出てきた。この傾向は諸富町一帯の川副庄においても同様な動きが出ていたものと考えられる。

足利尊氏により博多に九州探題が設置されると、探題一色道猷(範氏)は肥前国の御家人に起請文を提出させ、(一三七二)に九州探題として今川了俊(貞世)が九州にはいると、肥前各地の武士は探題勢に呼応していった。つづく一五世紀中の争乱の主流は、九州探題渡川氏とこれを援ける大内氏対少弐氏の争いであった。肥前の武士はそのいずれかの側について戦いを繰り返しているが、大体において佐賀・神埼以西の諸氏は少弐方に属し、三根・養父・基肄の三郡の諸氏は探題渡川氏に属することが多かった。

図8 寛文～貞享年中(1661～1687)作成の筑後国絵図。筑後川左岸に諸富村。



高城寺一鞏方丈

前伯耆守 ㊦

『肥前旧事』中の「高城寺文書」には、
 勅願寺、肥前国高城寺領、
 同国河副南北庄内極楽寺免田漆町伍段、並江上薬師堂
 免田老町、河上仁王講免田五段、北方分、米津土居外早
 鴻荒野老所、見四至寄進帳南方
 事、当知行不可有相違之
 由内大臣殿、御気色所候也、
 仍執達如件
 (二三四)
 建武元年十一月十二日

とある。これによると建武新政期においても高城寺は勅願寺であり、川副庄はその荘域を広げたらしく南北に分離されている。さらに、大堂にあった極楽寺の免田が南・北川副庄で七町五段に及んでいることがわかる。

『石志文書』の興国元年(一三四〇)に、

これによると、阿弥了西は「宮吉殿女房所」の「肥前国河副庄松丸名内塚本卅三坪壱町」を彦王より譲与されている。「阿弥了西」は前系図中の「諸富真保平四郎」とも考えられるが、時代的に若干疑問がある。ともかく筑後の豪族が川副庄内の松丸名を領有することになった。これらによって川副庄の名田化がみられていることや、川

(二三四九)
貞和五年十二月八日 彦王在判

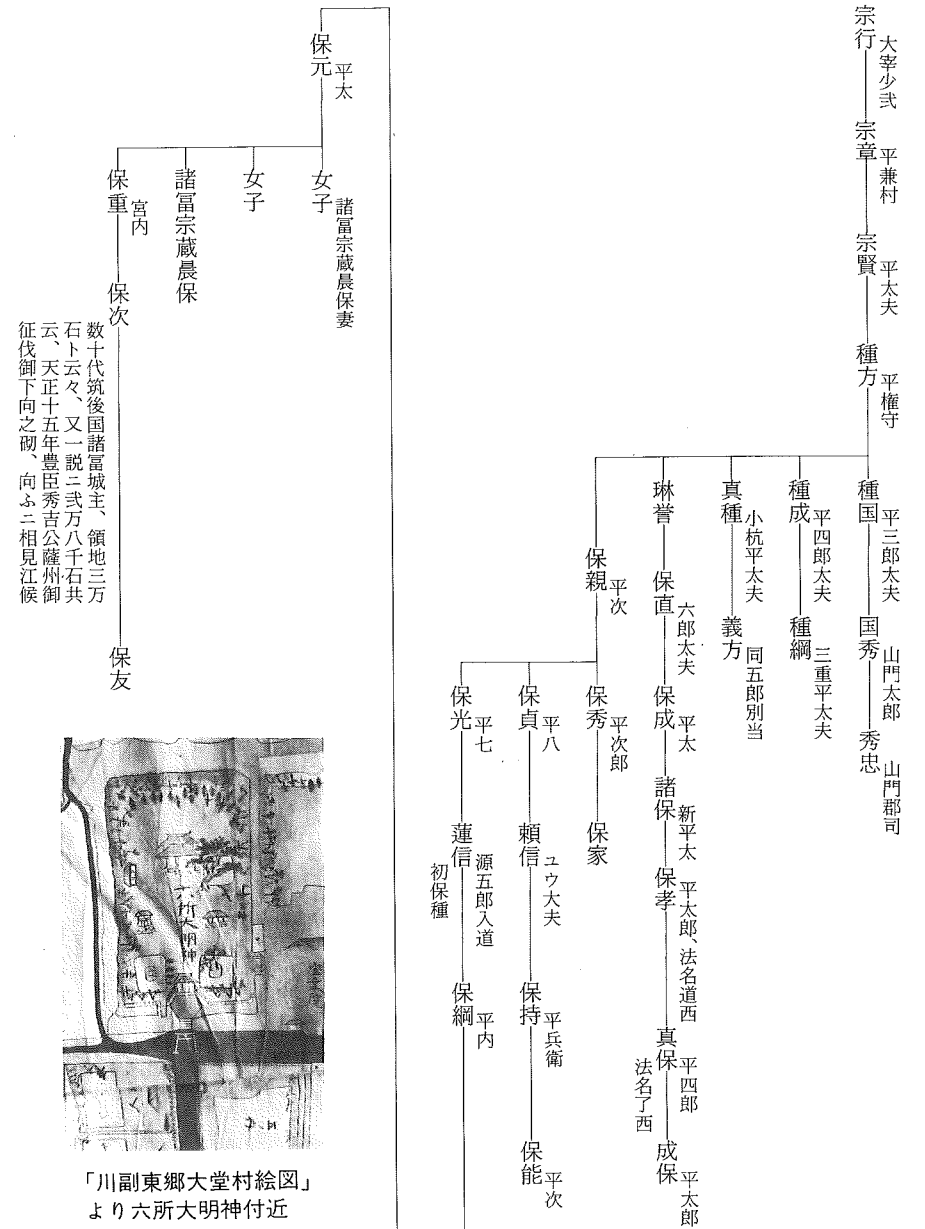
阿弥了西

如件

譲与 宮吉殿女房所

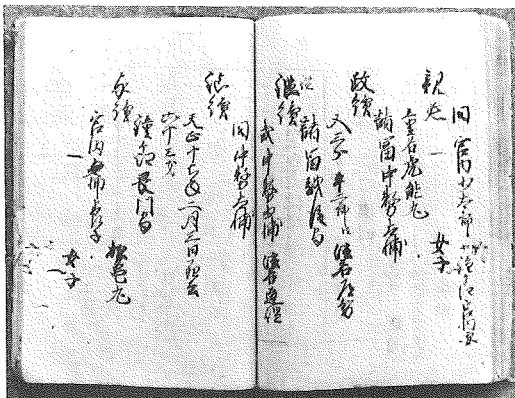
肥前国河副庄松丸名内塚本卅三坪壱町事右依置志所譲與也、然ルニ子々孫々無妨他可知行也、仍而為後日讓渡

系図冒頭の宗行とは、『肥陽諸系図』中の「諸富之系」に記されていた高見王七代の孫の、大宰少弐・大藍物の宗行と同一人物と考えられる。宗行の四代の孫の真種は通称を「小杭平太夫」という。つまり、諸富氏と小杭氏とは因縁関係にあったということになる。真種の子義方も「小杭五郎」を通称としている。『筑後国諸氏系図』中の文書(写)によると、諸富平内入道蓮性が善法寺又三郎に建武二年(一三三五)三月四日に筑後諸富内の田地の返却を申し出ている。さらに、建武三年(一三三六)九月付で諸富平六安国が豊福原合戦で筑後国守護の一員として戦い、それに対する軍忠状を指し出している。諸富平内入道蓮性が石垣不動坂鷹取山合戦で守護軍として活躍した旨の軍忠状を、建武四年(一三三七)三月十日付で奉行所へ提出している。つまり、筑後諸富氏は守護勢に加担しており、南北朝期は武家方の一員となっている。同文書(写)には、





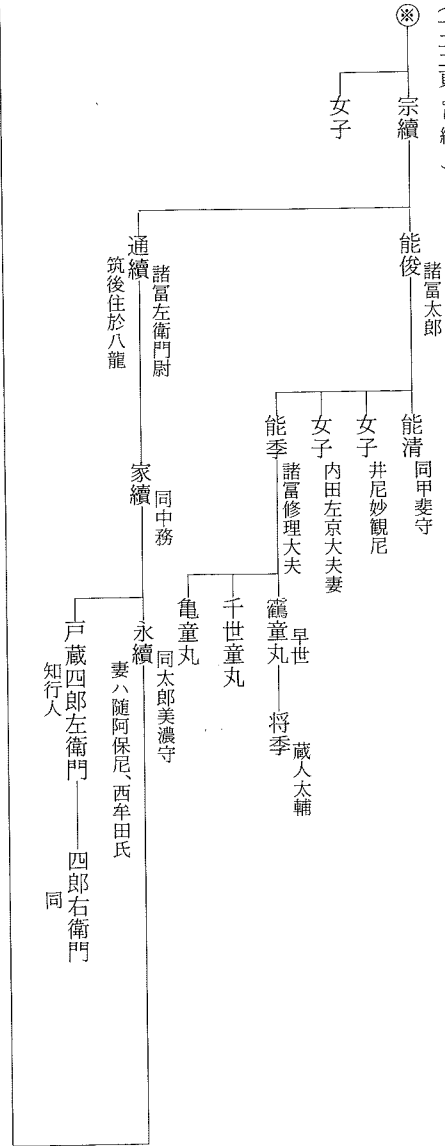
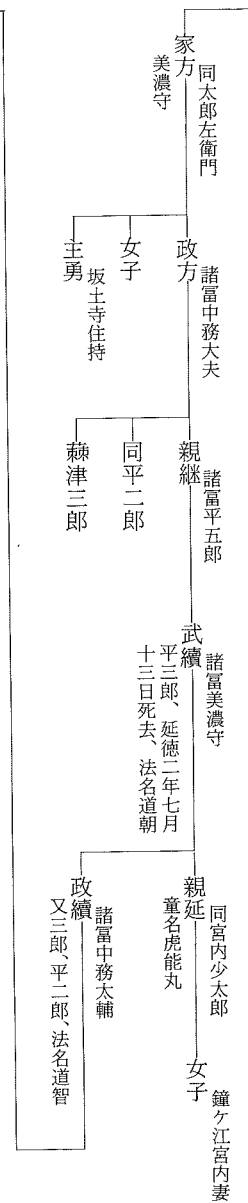
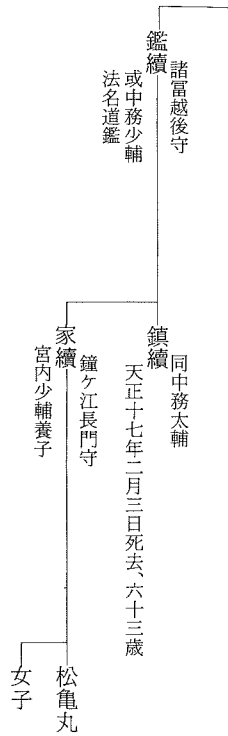
「諸富氏系図」より宗續の諸富進出の部分



「諸富氏系図」の最後の部分

とある。同系図には人物の生没年などが乏しく時代考証が難しいが、武續の没年が延徳二年（一四九〇）となっている。武續の三代の孫鎮續が天正十七年（一五八九）二月三日に六十三歳で没している。鎮續の弟家續は鐘ヶ江宮内少輔の養子となり、鐘ヶ江長門守を称している。家續の死で鎌倉期より当町に由緒深かった諸富氏は絶えた。しかし、その名跡は今当町名として受け継がれている。戦国期の

とある。同系図には人物の生没年などが乏しく時代考証が難しいが、武續の没年が延徳二年（一四九〇）となっ



副莊の武士による侵蝕を示している。

鎌倉初期に大堂を拠点として肥前に進出してきた諸富氏のその後の系図を『肥陽諸系図』によりみると、

（二二頁より続く）

足利四代將軍義持の頃には、室町幕府の權威は失墜し、「日本開白以來、土民蜂起これ初めなり」と世人を驚かせた正長の土一揆は、正長元年（一四二八）に発生した。この正長の土一揆発生の前年、つまり応永三十四年（一四二七）に佐賀市蓮池町から諸富町境一帯の小曲の地を拠点とした小田氏の下向がみられる。その後小田氏は典型的在地領主（国人）として成長していくのである。小曲城の天守閣は大字大堂字小曲の通称奥山の地にあった。この地は明治二十四年（一八九一）調査の地質図の模写によれば、周囲の土地より一〜二米ぐらい高くなっていたようである。

小田氏は源頼朝の重臣八田知家（下野国茂木郡地頭職）の後裔とい
う。『諸家系図』（佐賀県立図書館所蔵）所収の「小田氏系図」による



小曲城の天守閣跡地の通称奥山
(左手は佐賀江)

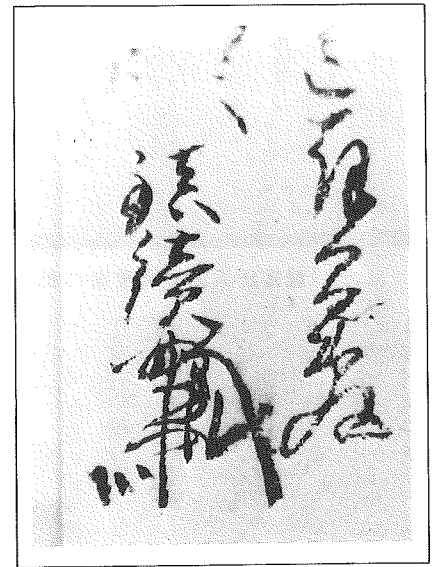
三 小田氏と少弐氏

(一) 小田氏の入封

諸富氏は後述する小曲城主小田氏や、田中城主の太田氏との関係は不明である。ただ、諸富鎮績が三根郡西島（現三養基郡三根町西島）城主の横岳氏に宛てた書状が二通残っている。その一通には、

尚、前日海月巻五送給候、則賞翫仕候、兼又其元之
様躰、御油断多く御格護専一候、我等茂来月廿日比、
出頭可申覚悟候、自然豊州へ御用共候者、無沙汰仕
間敷候、子細彼者可申候、（中略）仍而今度豊前目在
陣仕候之處、

とある。文中に「豊州へ御用」「豊前目在陣」とあり、豊前とは大友氏を指すものと考えられる。であれば、横岳氏と親密な関係にあった諸富氏は、横岳氏とともに少弐党であり、ともに大友氏との因縁があったものであろう。小曲城主の小田氏も少弐党であるから、小田氏と近密な関係にあったと考えられるが、それを証明する史料が見当たらない。諸富氏の解明は今後の課題である。



（「横岳家文書」）

諸富鎮績の花押